佐久の先人たち㊵

佐久の自由民権運動を実践した政治家

早川権弥

（1861～1921年）

自由と平等の精神をもって自由民権運動に励み、長野県議会では、廃娼運動を推進し、国会議員として、戦争の増税に反対するなど、明治の佐久を代表する政治家であった。

●自由民権思想による政治を目指す

早川権弥は、一八六一（文久元）年、前山の早川重右衛門の長男として生まれた。父は後の第十九銀行・佐久銀行頭取であり、佐久地方でも屈指の財産家であった。

権弥は村の学校を卒業すると、長野県師範学校へ入学し、新しい学問を身につけ、先輩たちからルソーの思想や、自由民権による政治の大切さを学んだ。

佐久郡には、伴野村出身の木内信が蓬田村（現佐久市蓬田）の学校に赴任しており、板垣退助の自由民権の考えに感動して、前山や伴野の青年たちと熱心に学習をしていた。

一八八二（明治15）年、権弥は「政治思想なき人民は国民と称すべからず」（日記）と自由党に入り、その翌年には東京で行われた党の臨時大会に出席して、板垣の考えを聞き、前山の政談演説会で報告した。

二年後には南北佐久自由党の代表として、大阪で開かれた自由党大会に出席したが、政府の圧力によって自由党は解散せざるをえなくなった。このことは彼の自由民権に対する意思を、より強くすることになった。

佐久の自由民権運動家たち、前列左から二人目が木内信、三人目が権弥、四人目が立川雲平（早川光彦氏提供）

一八八四年、埼玉県で秩父事件が起こり、政府の政策に反対する困民党の残党約三〇〇人が、十石峠を越えて大日向村（現佐久穂町）へ侵入してきた。困民党は海瀬村（現佐久穂町）の役場に押しかけ、「租税を減らし、徴兵を廃し、借金を無利子にせよ」などをかかげ、豪農や豪商をおそって、金品・刀剣・銃・食料などを奪って馬流（現小海町）に本陣をかまえた。

政府は陸軍高崎鎮台兵一二〇人と警察によって高岩から鉄砲で攻撃を加えた。この戦で困民党は死者一三人、逮捕者六〇人を出して敗れ、野辺山方面へと逃げ散った。

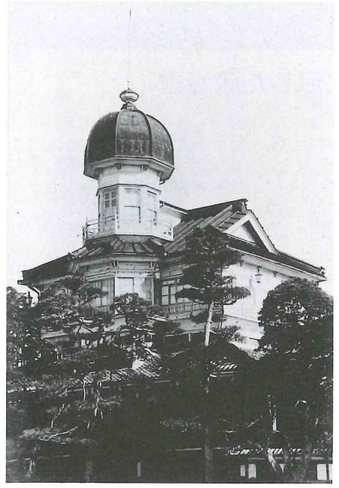
この事件に対して、権弥や木内ら佐久の自由民権運動家たちは、「合法的言論をもって戦うべきで、暴力をもってすべきではない…」と不参を決め、言論による立憲政治への道を選んだ。

しかし権弥は、「何ぞ好んで蓆旗を挙げん…」と、民衆の苦しみに同情し、政府の政策に憤り、各地の民権家と交流した。その年の十二月には、明治政府への挙兵を計画した飯田事件にかかわったとして、治罪法により、岩村田警察署に逮捕されたが、共謀の証拠はなく免訴となった。

一八八五（明治18）年、淡路島出身の代言人（弁護士）立川雲平が岩村田に移ってくると、権弥や木内らは立川の考えに賛同し、岩村田の万歳亭で東信有志懇談会を開いて、広く長野県下に同志を求めた。この運動は「信濃大懇談会」へと発展し、外務大臣井上馨の条約改正案の反対建白書となって一八八七年に元老院政府へ提出された。代表として上京した権弥は、保安条例により、一年六ヵ月の東京退去を命ぜられてしまった。（一八八九年に解除）

●議員になって自由平等の世を

権弥は新しい政治を実現するために、議員の道を志し、東信の有志に推されて県会議員に当選した。一八八八（明治21）年に信越鉄道が軽井沢まで開通したが、佐久は道路が狭く交通が不便であった。とくに佐久から山梨県や群馬県へ通じる道路は、狭くて曲っていたので、馬車や人力車が通りにくかった。これらの道を県の費用で拡げたりまっすぐに直し、千曲川を渡る頑丈な野沢橋の改修にも努力した。



岩村田遊郭のかめ屋（明治末頃）

権弥がとくに力を入れたのは廃娼問題であった。一八八九年に鼻顔稲荷神社近くに、六八人の娼妓をかかえた一〇軒の貸座敷からなる岩村田遊郭がつくられた。この女性たちは家が貧しかったために売られてきた人たちで、外に出る自由もなく、非人間的なあつかいを受けていた。権弥はこの年の通常県会に荻原政太と二人で廃娼議案を提出したが、一〇対二〇で否決された。そこで翌年に再び提案したが、一三対一五の僅差で敗れてしまった。

後に小諸義塾長になる木村熊二が佐久を訪れ、早川家と親しい交際をしていた。権弥も師と仰いで教えを受けていた。権弥とキリスト教佐久講義所の人々は、廃娼同盟をつくって、娼妓たちの救出にたずさわり、寄付を募り解放への活動を続けた。

権弥は自由教会の設立や佐久教会初代長老をつとめるなど佐久地方のキリスト教の発展につとめた。

一八九八（明治31）年三月に行なわれた第五回衆議院議員総選挙で、権弥は五九四票を得て国会議員に当選した。県会では実現できなかった政治を目指して国会へ登場した。第一二回帝国議会では伊藤博文内閣が、選挙法改正と地租改正案を提出した。この法案は日清戦争による出費を補うための増税が含まれており、否決されて解散となった。その年の八月に行なわれた臨時総選挙では、権弥は立候補を立川雲平に譲った。『佐久名流評林』には「その人の雅量に服しき」と書かれているが、立川の政治家としての力量に、自分の夢を託してのことであろう。

その後権弥は、新しく制定された南佐久郡会議員に当選し、副議長・議長として、南佐久郡の製糸業や農業の発展に貢献した。

一九〇八年からは前山村長となって、長い政治の経験を生かして村民の生活向上に尽したが、早川家の財産はほとんど使い果たしていた。

県政・国政・郡政・村政と、生涯を通して自由と平等の精神を貫き通し、廃娼運動に力を注いだ権弥を支えたのは、木村熊二の教えであった。

一九二一（大正10）年、権弥は六一歳でこの世を去り、貞祥寺の墓地に葬られた。

（小林　收）

○参考文献

佐久市志刊行会『佐久市志』近代編　佐久市志刊行会　一九九六

木内政太郎『佐久名流評林』　佐久名流評林著作部　一九〇九

秋山彌助『南北佐久自由主義者の政治運動記録』　一九三九

大井隆男「明治期における新思潮の受容」『千曲』東信史学会　一九七九